

●トピックス

## 看護学生座談会

出席者  
大塚瞳さん  
奥野理恵さん  
竹内千都世さん  
西山知佳さん  
松田亜希子さん  
大町弥生看護学科教授



高齢化の進展や疾病構造の変化によって、近年日本でも看護職の活躍する分野が広がり、さまざまな知識や技術を身につけていることが求められるようになってきた。そんな中で4年制看護大学を卒業した看護スタッフが、これからどんな活躍をしていく

のか、期待と関心が高まっていると言える。

卒業を間近にひかえた滋賀医科大学看護学科のみなさんを集っていただき、看護婦をめざすことになったきっかけや、学生生活で印象に残ったこと、将来の抱負などについてお話を聞かせていただいた。

看護婦になりたいと思われたきっかけは？

奥野 中学生くらいからなりたいたいと思っていました。たくさんの方と出会って、深く関わっていく仕事であるというところに魅力を感じますし、特にさまざまな人生を歩んでこられた患者さんと接することで、自分も成長できればという期待がありました。

松田 母が看護婦で、小さい時から母の姿を見て自分もなりたいたいと憧れていました。とはいえ、自分の進路として看護婦という仕事をはっきりと選んだのは高校の進路決定の時です。母は現在ケアマネージャーをしています。やり甲斐のある、一生続けられる仕事だと思います。

西山 幼稚園の頃、大好きだった小児科の先生のそばにいつも看護婦さんがいたので、迷わずこの職業を選びました(笑)。

私は、京都府立医大の医療技術短大を卒業した後、3回生から本学に編入学しました。短大の時の実習

はじめて患者さんと接する実習で看護の厳しさ、素晴らしさを実感



竹内

で、もっと基礎を勉強する必要があると痛切に感じて4年制への編入を決意しました。

竹内 デスクワークではなく、人と接する仕事をしたい、そして一生続けられる職業を選びたいと思っていました。中学生の頃からなりたいたいと思っていましたが、高校は普通科に進学してそこでじっくり考えた末、看護婦の道を選びました。

大塚 小さい頃から「看護婦になって





松田



ほしい」と母から言われて、ものごころついた時から、テレビなどで看護婦を見ると意識してました(笑)。高校で理系文系と分かれる時に、はつきりと看護婦になろうと決意しました。

4年間の学生生活で印象に残ったことはどんなことですか。

大塚 実際に入院されている患者さんと接することになった2回生の基礎実習と3回生の秋から1年間の臨床実習です。現場は予想以上に忙しそうで、卒業後やっていけるのかちょっと不安になったりしました。

それから、決められた時間働くだけではだめだということ、社会に出てからも学ぶことがたくさんあって、勉強は大学で終わるものではないということ

奥野



とを強く感じました。現在はそれが辛いのはどういうよ、どこまで自分が伸びていけるかという期待があります。

竹内 私も実習がいちばん印象に残っています。はじめての現場で緊張しましたが、たくさんの課題をこなしながらの実習はたいへんでしたが、指導者の方と教官に支えられて無事終了した時にはとても大切な経験ができたという気持ちになりました。

西山 編入学をして、いろいろな方と出会えたこと、友人が増えて学生生活がとても充実したのになりました。編入生の中には、一度看護婦として働いた経験のある人もいて、参考になる

話を聞かせてもらいました。

合唱団に入って活動したり、看護学生のための海外留学でオーストラリアにホームステイして現地の病院を訪ねたり、積極的に活動することで多い学生生活を送ることができたと思います。

松田 大学では専門科目だけでなくさまざまな教養科目を学んだり、時間的な余裕もあったので他の分野の人と友だちになったり、いろいろなことを体験しながら、自分の感性を磨くことができたと思います。

奥野 テニスサークルの活動に熱心に取り組んだことです。3年前から看護学生の大会があって、他大学との交流なども活発に行っていました。

みなさんは大町先生の「老人看護学」を卒論のテーマに選ばれたわけですが、もっとも興味を持って勉強されたのはどんな科目ですか。

西山 やはり卒論の「老人看護学」です。老人看護学を選んだのは、まわりにお年寄りがいて、看護や介護について普段から考える環境があったからです。

卒論を作成するプロセスは、まさに自分が学びたかつ



大塚

たことで

す。なぜこの現象が起こるのか、その根拠はなにかを一つひとつ明らかにしていきながら、学ぶことのおもしろさを感じました。考えてケアできるナースになるために、この卒論のプロセスがあるのではないかと思います。

竹内 私も卒論にもっとも熱心に、たくさんの時間をかけて取り組んでみました。ここでデイケアに通う高齢者の方から多くのことを学びました。

大塚 楽しかった講義はコミュニケーション論や人間関係論です。授業では実際に自分で心理テストを行ったりして、新たな自分の発見があって、とても興味を引かれました。たくさんのさまざまな患者さんと接していくためには、一つのコミュニケーション法では無理だということ学びました。

松田 今になってみればやはり臨床実習が印象に残っていますが、その時はレポートなどの課題をこなすのがたいへんという思いしかありませんでした。実習の中でも、外科がもっとも充実していたように感じられるのは、結果がよく見えるからかもしれません。一度出会った患者さんは今も忘れられませんし、出会いの楽しさというか、



西山



看護の仕事の素晴らしさを実感しました。

奥野 やはり卒論にもっとも熱心に取り組みました。4年制の看護大学にしてよかったと思うのは、3、4回生に

### 自分で考え、学び解決していく姿勢を持ち続けること

これからの進路について聞かせていただけますか。また、どんな分野での活躍をめざしておられますか。

なると卒論のゼミなどで先生と接する機会が多くなって、きめ細かな指導をしていただけたし、自分の考え方を見つめ直したり、ゆっくり考える力を身につけたり、根拠つけて考える力を養ったりできたと思います。

大塚 東京の大病院への就職が決まっています。外科を志望していますが、たくさん学ぶいろいろな経験を積んでから、大学院に進むことも視野に入れていきます。いずれは在宅医療などにも取り組んでみたいと思います。

竹内 現場で働いて基礎を身につけた後は、病院以外の例えば地域医療の分野などで活躍できればと考えています。

西山 大学院に進学して、老人看護学の講座でもっと勉強したいと考えています。

卒論では高齢の糖尿病患者を対象に、食事療法や継続受診といった保健行動の背景をテーマにしていますが、大学院ではこのテーマをもっと深く掘り下げていくか、あるいは今までは行われていない健康な高齢者を対象とした、予防的な領域への看護の介入をテーマにした研究ができないかと思っています。

松田 滋賀医科大学附属病院への就職が決まっています。患者さんの気持ちにならなくて考えられるようないい看護がしたいという、この今の気持ちをいつまでも忘れずに持ち続けたいと思います。

奥野 私も同じく、この春から滋賀医科大学附属病院で働くことが決まっています。いつまでも学ぶ気持ちをお忘れないようにしながらがんばりたいですね。

みなさんありがとうございます。最後に大町先生のご感想をうかがって終わりたいと思います。

大町 もっとも患者さんに近い位置で仕事をするのが看護職であるといえます。そのためには日常生活の中でも相手のいうことを理解できること、そして患者さんや家族からの言葉以外のサインや表情などから、身体的な状況を受信でき、ケアしていく能力が必要です。それは観察する目と判断する力です。さらに考えたことを自分の言葉で表現し、患者さんに説明できることも必要です。

例えば介護保険導入後の訪問看護の現場では、これまで以上に一人で判断し、実践することが求められてきています。看護学科4年間の授業や実習の場で、看護学の基礎的知識・技術と地域看護学を統合して学んでいることに

より、今、この方に何が必要かが判断できる力と、わからないことをそのままにせず、考え学んで行くことの能力が身に付いていると思います。卒論のプロセスの中でも、行う看護の意味づけ、根拠について考えることに時間を使いましたね。卒業後もその姿勢を継続して行ってほしいし、臨床現場でも育てるようにしてほしいと思います。

平成14年3月に5期生が卒業する本学看護学科の歴史は浅く、まだ実績は見えにくいかもしれませんが、皆さんが先輩たちとともに大いに活躍してくれることを楽しみにしています。

今後自分自身をよく知り、すべてに完璧でなくていいから「これは苦手だけど、これは任せて！」といえるものをもつこと、患者さんと家族を含んだチームの中で、看護職としての責任を果たすことができる個性をもてるようになるといいですね。



大町 弥生 教授  
(看護学科)